

＝教育実習生による推薦図書＝

今回は、毎年この時期に恒例の教育実習生による推薦図書の紹介です。教育実習にいらした先輩方からみなさんに是非読んでほしいお勧めの本を紹介してもらいました。

※書名の横の【420.E20.5】などは、図書館での請求番号です。

「きみの友だち」 重松 清/著 (新潮文庫) 【913.S5.5】

事故にあい、足が不自由になり、孤立してしまった少女とその弟を軸とした物語が描かれた連作短編集です。すべての物語でいじめを筆頭に、先輩への憧れや嫉妬、後輩への妬みなど、心の葛藤が描かれており、それを通して「友だち」のあり方、「友だち」の存在のありがたさ、「友だち」の重さを考えさせられます。「友だち」ってなんだろう？と考えたとき、ぜひ読んでみてください。

「MOMENT」 本多 孝好/著 (集英社文庫) 【蔵書なし】

主人公の大学生は病院で清掃のアルバイトをしています。その病院には死を間近にした患者の願いを叶えてくれる人がいる、という噂がありました…。

読みやすく、面白いのに、ラストはとても考えさせられます。何が正義なのかは、人によって違って、時に他の正義と自分の正義がぶつかり合います。読み終わった後は、皆の正義ではなく、自分の正義について考えてみてください。

「一瞬の風になれ」 佐藤 多佳子/著 (講談社) 【913.S84.1】

中学までサッカーに取り組んでいた主人公「新二」が高校では一転、陸上競技に熱い思いを持って取り組む物語です。幼なじみの天才スプリンター「連」の走りに魅せられて陸上競技部への入部を決意。初心者ながらもライバルに勝とうと一生懸命に努力を行い、成長していきます。

何かに熱心に打ち込む姿は陸上競技経験者だけでなく他の部活動の所属者も共感できる、元気をもらえる作品であると思います。

「竜馬がゆく」 司馬 遼太郎/著 (文春文庫) 【913.S44.5】

「竜馬がゆく」は私が高校生のときに読んだ図書です。竜馬が持つ高い志やひたむきに取り組む姿勢、人を引き付ける愛嬌などに大きな影響を受け、私の理想のリーダー像となっています。この本を読むと、将来に向けて前向きに取り組むエネルギーが湧いてきます。是非、高校時代に読んでほしい一冊です。

「スラムダンク勝利学」 辻 秀一/著 (集英社) 【蔵書なし】

著者自身が大ファンである漫画スラムダンクから学んだ必勝法が書かれています。目標設定をする、今を生きる、情熱を注ぐ、結果をどう捉えるのか…など、その必勝法の要素が現れている漫画スラムダンクの場面とともに、わかりやすく解説されています。スポーツはもちろん、文科系のこと、そして人生における勝利のためにきっと役立つ本です。

「一瞬の風になれ」 佐藤 多佳子/著 (講談社文庫) 【913.S84.1】

主人公の神谷 新二が高校に入学するところから物語は始まります。新二は中学まではサッカーをしていましたが才能の壁を感じ、親友で中学陸上界の実力者であった一ノ瀬 連とともに、高校では陸上部に入部しました。もともと努力を惜しまないタイプの新二は、連に引っ張られる形でめきめきと成長してゆきます。

高校陸上部の話ですが、専門的な知識は一切必要なく陸上初心者の私でも楽しめました。また、スポ根的な内容だけでなく、友情や恋愛の話も随所に散りばめられているので、幅広い人にお勧めできる本であると思います。

「日本男児」 長友 佑都/著 (ポプラ社) 【蔵書なし】

華やかなサッカー選手は皆エリートだと思ってしまうが、この本を読めば彼が努力の人だとわかります。恵まれない環境であってもヘルニアを患っていても、「今を頑張らねば明日はない」と努力し、周りへの感謝の気持ちを持つ長友選手の熱い心が注入されている一冊です。

読むと、サッカーに関係がなくとも何か目標を掲げ、達成のために努力するエネルギーがわいてくるはずです。心にグッと来るフレーズも多く文章はシンプルで読みやすいので、北野生にお勧めします。

「風が強く吹いている」 三浦 しをん/著 (新潮文庫) 【913.M80.2】

箱根駅伝を題材にした青春小説。素人集団が箱根を目指すストーリー。箱根を走るランナーたちの感情の描写にいつのまにか自分も走っているような感覚になった。

一本の襷に込められた思いが繋がっていく。ひたむきに走り続ける彼らの強さに思った以上に感動した。走ることの奥深さを感じる一方で、走る行為はどこか人生に似ているのかなとも。

普段駅伝を見ない人にも手にとってほしい一冊です。

「ヴィヨンの妻」 太宰 治/著 (新潮文庫) 【918.D1.1-9c】

太宰治などと聞くと、教科書に出てくるような堅苦しい読みものと思われるかも知れませんが、この短編集は太宰のユーモアも垣間見られて、とても読みやすいです。特に表題作の『ヴィヨンの妻』では、酒好き女好きのダメ夫の借金を返済するため、小料理屋で奮闘する26歳の女性が描かれています。

希望を失っていた女性が、「働くこと」を通じて日常に輝きを取り戻し、その中でよりよい家庭を追い求める姿には心打たれるものがあります。

「最後の授業 ぼくの命があるうちに」 ランディ パウシュ/著 (武田ランダムハウスジャパン)
(原著:「The Last Lecture」Randy Pausch/著 (Hyperion)) 【377.P4.1】

Youtubeでも放映された、ガンによって余命3カ月～半年と医者宣告されたある一人の大学教授の話。授業の演題は『子供のころからの夢を本当に実現するために』。それはまだ物心つかない自身の子供達へのメッセージでもありました。

私は英語が苦手な人で、これは原書を大学2年の時英語の授業半期で全訳しました。苦手なのに全訳するのがあまり苦でなかったくらい、分かりやすく、面白くて興味深い文章でした。

原書と対訳しながら読むこともオススメです。